

国立国会図書館関西館 第29回資料展示

結構もたげ 不本たげ

展示資料解説



画像は『巨泉おもちゃ絵集』より

本展示では、ネコの諸相を「科学・生物学」、「ネコと人の文化・社会的な関わり」、「表現・創作物のモチーフ」の観点から、当館所蔵の資料約 50 点をご紹介します。

※資料展示タイトルの由来

「たいへん結構だ、の意をふざけていう言葉」（『デジタル大辞泉』より）である「結構毛だらけ猫灰だらけ」をもとにしています。「男はつらいよ」の寅さんの口上として有名です。

「猫灰だらけ」ならぬ「ネコ本だらけ」には、「展示会場にはネコの本がいっぱい！」という思いを込めました。

▶目次

	ネコを知る～科学的な視点から～.....4
	ネコと生きる～ネコと人の関係～.....11
	ネコを描く～表現されたネコ～.....20
	コラム26

凡例

- ・ 展示の順番にしたがって資料の情報を掲載しています。
- ・ 書誌情報は「タイトル / 編著者名等, 出版者, 出版年」の順に記載しています。
【】内は資料の請求記号です。
- ・ ★印は、デジタル化が済んだ資料の原本であることを示します。デジタル化資料は全ページ、国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます。公開範囲は資料により異なりますが、館内の端末からはすべて閲覧可能です。

< デジタル化資料を閲覧するには >

- ・ 国立国会図書館オンライン（<https://ndlonline.ndl.go.jp/>）で、ご覧になりたい資料の請求記号やタイトル等により資料検索を行い、検索結果の画面で「デジタル」のボタンをクリックしてください。
- ・ または、国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/>）で、ご覧になりたい資料の請求記号やタイトル等により資料検索を行ってください。
- ・ 各資料の公開範囲については、書誌事項の後ろに付した以下の表示をご確認ください。

インターネット公開

インターネット上で見ることができる資料です。
ご自宅の PC 等でも閲覧可能です

館内／図書館送信

国立国会図書館の館内、および図書館向けデジタル化資料送信サービス¹に参加している図書館で閲覧が可能な資料です。

館内限定公開

国立国会図書館の館内でのみ閲覧が可能な資料です。

¹ 詳細については当館ホームページをご参照ください。

https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/index.html

ネコを知る～科学的な視点から～

人間にとって身近な動物「ネコ」について、私たちはどれくらい知っているのでしょうか。このトピックでは、ネコに対する探究の歴史をかいまみるとともに、ネコという生き物を知るうえで役立つ資料を、科学的視点からご紹介します。

★1. 動物学 上 / ブロムメ 著, 田中芳男 抄訳, 中島仰山 画. 博物館, 明 7.11 【4-68】

インターネット公開

ドイツ人ブロムメの博物学書の動物部分を、博物学者である田中芳男が訳したもの。中嶋仰山（なかじま ぎょうざん）による色彩画も添えられている。当館所蔵分には、東京博物館と教育博物館（どちらも国立科学博物館の前身）の蔵書印が押されており、同館から寄贈を受けたと思われる。ネコについては、体が小さく、多くは斑模様が無いが、縞模様があるネコもいること、世界中で飼われていることが書かれている。

★2. 和漢三才図会 中之巻 / 寺島良安（尚順）編. 中近堂, 明 17-21 【28-96】

インターネット公開

大坂の医師寺島良安（てらじま りょうあん）により編纂された、江戸時代の百科事典。明の『三才図会』（さんさいずえ）に倣い、天文・人倫・芸能・動物・植物・日本の地域等についてまとめている。ネコに関しては、『本草綱目』『万宝全書』『三才図絵』の記述や著者の所見等に基づいて、毛の色や生殖、成長をはじめとした体の特徴等が書かれている。展示資料は、中近堂により明治時代に出版された翻刻版だが、江戸時代に出版されたものを東京本館で所蔵しており（『倭漢三才図会』【031.2-Te194w-s】）、国立国会図書館デジタルコレクションから資料を閲覧できる。

★3. 猫 / 石田孫太郎 著. 求光閣, 明 43.5 【96-460】

インターネット公開

ネコに関する日本最初の研究書と言われている資料。「自ら隗たるの覚悟をもって」外国の資料や自身の観察等をもとに所見を述べ、当時評価が高くなかったというネコの愛らしさを伝え、面目躍如を図ることを目的としている。ネコの種類・性質と寿命・毛色・日常生活・表情・夫婦親子関係のほか、当時の明治政府の政策を踏まえたネズミ退治によるペストへのネコの効用など、幅広いトピックを扱っている。ちなみに、タイトルロゴが3匹のネコのシルエットによる漢字  になっている。

参考文献：展示資料 34 『猫が歩いた近現代』 p. 47

4. ねこ：その歴史・習性・人間との関係 / 木村喜久弥 著，法政大学出版社，1973【RB651-16】

昭和 29 (1954) 年に著者が発表した私家版の随筆『猫』がきっかけとなって出版された一冊。著者は病床にあったため、自身での実験や観察はかなわなかったものの、古今東西の資料を収集し、随筆『猫』へ自然科学的内容を加え大幅に改訂増補を行ったと述べている。ネコの体の特徴や歴史、オスの三毛猫が少ないことに関する学説の検討や人との関係等、あらゆる角度からのネコの分析・研究結果が展示資料にまとめられている。

5. 猫を科学する / 紺野耕 監修. 養賢堂, 2009.10【RB651-J200】

ネコ好きの期待に応えるべく、ネコに関する様々な知識をまとめた本。雑誌『畜産の研究』に「猫を科学する」というタイトルで連載された内容を基にしている。「猫」という名前の由来や鳴き声、イエネコの起源、品種、遺伝、行動、体の仕組み、食べ物、病気のほか、人との関係史、文学作品、ペットとしてのネコ、福祉など、当時の学問的進歩からネコと暮らすうえで知っておきたいことまで、あらゆる分野が網羅されている一冊である。

6. 知りたい！ネコごころ(岩波科学ライブラリー；292) / 高木佐保 著. 岩波書店, 2020.2【RB651-M80】

著者が実施したネコのエピソード記憶、「推理」能力、飼い主をどのように

認識しているのかに関する研究のほか、ネコの心の働きや進化に関するいくつかの研究についてまとめた1冊。研究を進める中での、論文には現れない紆余曲折等も書かれており、成果だけでなく、研究手法や背景、過程についても詳しく知ることができる。

なお、電子納本のため展示は行えていないが、本書にまとめられている研究を基にした博士論文も当館で閲覧できる(『表象操作能力の比較認知科学的検討』2018 <https://id.ndl.go.jp/digimeta/11287407>)。

7. ネコの行動学 / パウル・ライハウゼン 著, 今泉吉晴, 今泉みね子 訳. どうぶつ社, 1998.4 【RB651-G311】

ネコの習性・行動についてもっと詳しく知りたい人向けの本。『Katzen:eine Verhaltenskunde』の第6版を翻訳したものであり、2017年には丸善出版から復刻版が出ている。本書は、「ネコ博士」として世界的に名高い筆者が1949年から1955年にかけて行った、計30頭のイエネコやノラネコ等を対象とした観察・実験を基にしている。獲物に対する行動や、他のネコとの出会いといった社会行動について詳細に記述されており、60年以上前の研究ではあるものの、現在のネコの行動を理解する上でも参考となる一冊である。

★8. 飼イネコ(*Felis catus*)「集団」における個体間関係 / 上田尚美 [著]. [1989] 【UT51-89-M12】

館内限定公開

関西館の特徴的な所蔵資料の一つに、博士論文がある。この博士論文は、ペットとして人に飼われているカイネコを対象に、複数個体かつ閉鎖的な環境で育成した時の行動・ネコ間関係の観察結果がまとめられている。同じケージ内に複数のメスネコがいると出産が同調し、共同保育を行うこと、他のメスネコの子ネコが混ざると母ネコは自分の子どもがわからなくなることが指摘されている。また、同一ケージ内のネコは生活時間が同調したこと、ケンカはオス間のみで見られてこと等が述べられている。

★9. ねこひねり動作の解明とロボットによるねこひねりの実現 / 河村隆 [著]. [1992] 【UT51-92-U129】

館内限定公開

背中側から落下したネコが行う動作「ねこひねり」の原理を解明し、ロボットでの再現を試みた研究の博士論文。ネコや体操選手のように外力によらず内力のみで姿勢保持ができるロボットを作ることが研究の動機とされている。写真観察による「ねこひねり」の動作のモデル化・計算機でのシミュレーションを行い、その結果を基に「ロボットネコ」を作成している。ちなみに、生物の持つ機能や形状を模倣して科学技術等に応用することはバイオミメティクスと呼ばれている。ネコについては、舌の表面の形状が掃除機に活用されている例等が見られる。

10. 猫が食べると危ない食品・植物・家の中の物図鑑：誤食と中毒からあなたの猫を守るために / 服部幸 監修, ねこねっこ 構成. ねこねっこ, 2021.3 【Y78-M2258】

ネコが食べてはいけないものは何か。人間にとって身近な食品・植物・物にひそむ、ネコが口にすると危ないものに焦点を当て、危険度を示しつつ解説が行われている。危険な理由や口にした場合の症状、対策のほか、与え方に注意が必要な食品についてもまとめられている。ネコの食を知る、または、ネコと暮らすうえで参考になる一冊である。

11. イリオモテヤマネコの食性ならびに採食行動 / 安間繁樹 [著]. [1979] 【UT51-56-I3】

西表島の生態系のトップに君臨するというイリオモテヤマネコに関する博士論文。研究当時、イリオモテヤマネコ発見から十数年しか経過していなかった。論文には、糞分析・直接観察・胃腸の内容物・食べ残しの調査による食性調査、直接観察による採食行動の調査がまとめられている。調査の結果として、イリオモテヤマネコは西表島の大部分の動物を捕食対象としていること、他のネコ科動物と概ね同様の方法で獲物をしとめていること等が述べられている。

12. イヌおよびネコにおける慢性腎臓病の早期診断法に関する研究 / 宮川優一 [著]. [2010] 【UT51-2010-A187】

13. 猫が 30 歳まで生きる日 : 治せなかった病気に打ち克つタンパク質「AIM」の発見 / 宮崎徹 著.時事通信出版局 2021.8 【RB651-M153】

ネコの多くが発症するといわれている病気が「腎臓病」である。関西館でも、ネコの腎臓病の症状・対症・診断方法に関する図書、博士論文、雑誌記事を多数所蔵している。これまで、腎臓病は治せない病気とされてきたが、現在、東京大学教授の宮崎徹氏により、ヒトとネコの腎臓病等の様々な病気を治せる可能性を持つタンパク質「AIM」を用いた治療薬の研究が進められている。展示資料 13 の出版前、時事通信に掲載された 2021 年 7 月 11 日の記事(※) がきっかけで、ネコの腎臓病治療薬研究へ寄付が殺到し話題を呼んだことは記憶に新しい。同書には、AIM の発見・働きの究明の経緯やネコの腎臓病治療薬の開発過程・状況等がまとめられている。

※ 「ネコの宿命」腎臓病の治療法を開発 寿命が 2 倍、最長 3 0 年にも
東大大学院・宮崎徹教授インタビュー JIJI.COM 2021/7/11

<https://bookpub.jiji.com/book/b584579.html>

●小特集：ネコとマタタビ

14. 木天蓼(またゝび)ノ麻醉作用ヲ有スル成分ニ就テ / 清水茂松 (掲載誌 東京医学会雑誌 / 東京医学会, 29(4) 1915.5 p.301-326 【雑 27-2】)

15. On the Structure of Actinidine and Matatabilactone, the Effective Components of Actinidia polygama / by Takeo Sakan, Akira Fujino, Fujio Murai, Yasuo Butsugan, Akio Suzui (掲載誌 Bulletin of the Chemical Society of Japan / Chemical Society of Japan, (32) 1959.3 p.315-316 【Z53-B35】)

16. マタタビの化学的研究有効成分アクチニジンについて / 藤野明 [著]. [1960] 【UT51-41-E3531】

17. ネコがマタタビに反応する生物学的意義の解明 : マタタビへの顔の擦

**り付けは蚊への化学防除を可能にする / 上野山怜子, 西川俊夫, 宮崎雅雄
(掲載誌 化学と生物 / 日本農芸化学会 編, 59(9) 2021.9 p.435-440
【Z18-26】)**

大好物のたとえであることわざ「ネコにマタタビ」。ネコがマタタビを好むことは古くから知られているが、この「マタタビ反応」のメカニズムは2021年に明らかにされた。研究の変遷を関西館の資料数点で簡単にたどる。

1915年に発表された東京帝国大学の清水茂松氏による論文(展示資料14)で、イヌやネコに対する麻酔作用を持つ成分として「マタタビ酸」(C₂₈H₄₀O₈)が特定された。しかし、その後、他の研究者による研究が行われるものの「マタタビ酸」なる成分は得られなかった。

そして、1959年、大阪市立大学の目武雄(さかん たけお)氏らが、展示資料15でネコの興奮作用を引き起こす成分として「アクチニジン」と「マタタビラクトン」を発表した(※1)。また、「アクチニジン」については、展示資料15の著者の一人である藤野明氏の博士論文(展示資料16)にもまとめられている。

ところが、それから60年以上がたった2021年。岩手大学・名古屋大学・リバプール大学・京都大学の共同研究により、ネコのマタタビ反応を引き起こす成分として「ネベタラクトール」が同定され、マタタビ反応は蚊を忌避するための本能行動であることが明らかにされた。研究論文はアメリカ科学振興協会のオンラインジャーナル『Science Advances』に掲載されており(※2)、関西館の所蔵資料では展示資料17で研究成果を知ることができる。

※1 同研究に関する日本語の文献は以下等がある。

またたびの研究から / 目武雄(掲載誌 化学教育 / 日本化学会, 12(1) 1964.3 p.16-22 【Z17-60】)

https://doi.org/10.20665/kagakukyouiku.12.1_16

※2 The characteristic response of domestic cats to plant iridoids allows them to gain chemical defense against mosquitoes / Reiko

Uenoyama [et al]. Science Advances. American Association for the Advancement of Science. 7(4) 2021.1
<https://doi.org/10.1126/sciadv.abd9135>



ネコと生きる～ネコと人の関係～

人がネコを飼うようになった約1万年前の新石器時代以降、ネコへの対し方は様々に変化してきました。このトピックでは人とネコの関係性にスポットをあてて資料をご紹介します。

18. 猫の世界史 / キャサリン・M・ロジャーズ 著, 渡辺智 訳. エクスナレッジ, 2018.3 【RB651-L355】

古代エジプトでは、イヌやワニなどの動物と同様にネコも神格化され、女神バテトはネコの姿として表現された。一方で、中世ペルシャや古代インドでは偽善者の象徴とされたり、中近世のキリスト教社会では悪魔の使いや魔女が姿を変えたものとして虐待を受けたりと、ひどい扱いを受けていた。西洋ではようやく18世紀頃にネコがペットとして飼われることが広まっていったとされている。

展示資料は、人間社会においてこれまでネコがどのように捉えられていたか、古代エジプトから現代まで、世界各国の絵画や文学、文献から読み解いている。著者のKatharine M. Rogersは、ニューヨーク市立大学ブルックリン校および大学院センター名誉教授。動物や食物関連の文献を執筆し、日本では『豚肉の歴史（「食」の図書館）』（2015）も刊行されている。参考文献：展示資料23『猫の歴史と奇話』、展示資料30『淡青：東京大学広報誌』

★19. 「宇多天皇御記」（掲載資料 列聖全集. 宸記集 上巻 / 列聖全集編纂会 編. 列聖全集編纂会, 大正4-6【328-378】）

インターネット公開

ネコはいつ日本にやってきたのだろうか。奈良時代頃、貴重な経典類をネズミの害から防ぐために、それらとともに輸入されたという説がある。ネコに関する日本での最古の記録は平安時代に遡る。景戒による仏教説話集『日本霊異記』（にほんりょういき 822頃成立）とされ、死者がネコに生まれ変わる輪廻の話である。一方、史実として飼いネコが確認できる最初

の文献は、宇多天皇（在位 887～897）の日記である展示資料と言われる。宇多天皇が飼いネコに毎日与えていた乳粥（にゅうしゃく）は、牛の乳で作った粥で当時は高級品だったようだ。宇多天皇がネコに話しかける記述からもネコを愛おしむ気持ちが伝わってくる。

★20. 御殿女中 / 三田村鳶魚 著. 春陽堂, 昭和 5 【608-70】

インターネット公開

宇多天皇の他にも、身分の高い天皇などがネコを寵愛した記録が残っている。ネコを家族のように愛することが一般的になったのは現代になってからと言われており、イヌと同様にぞんざいに扱うことが普通だった時代に別格の待遇を与えていたことがわかる。篤姫（あつひめ）として知られる江戸幕府 13 代将軍徳川家定夫人、天璋院（てんしょういん）もその一人。展示資料は天璋院の奥女中を務めた大岡ませ子から著者が聞き取った奥女中の仕事やしきたりなどを中心に収録しており、天璋院が飼っていたネコの餌や暮らしについても触れている。

★21. 多聞院日記. 第 2 巻 / 英俊 著, 辻善之助 編. 角川書店, 1967
【210.48-E38t-Tk】

館内 / 図書館送信

奈良興福寺の院主、多聞院英俊（たもんいん えいしゅん）らの日記。1478（文明 10）年から 1618（元和 4）年にわたり、戦国時代から近世初期の奈良・京都を中心とする社会・文化を知る貴重な史料とされる。天生 5 年 5 月 7 日の部分には、「ナラ中ネコ・ニワ鳥安土より取に來とて、僧坊中へ方々隠了、タカ（鷹）ノエ（餌）ノ用云々」とある。これは安土の織田信長の鷹狩りで餌にされるのを恐れて、奈良中のネコやニワトリを隠したというもの。財産類を隠す隠物や預ける預物について『多聞院日記』などに多数の記述がみられることから、この習俗は中世で広く行われていたようだ。とりわけ寺は、ものや動物など人以外の避難所、アジールとしても機能していた。

参考文献：藤木久志『村と領主の戦国世界』1997【GB245-G8】、奈良市史

★22. 蚕飼養法記 / 野本道玄 [著]. 青森県養蚕組合聯合会, 昭和6【232-319】

館内／図書館送信

一部の特権階級などでネコは愛情を注がれ厚遇を受けたが、一般的には、穀物や書物に対するネズミの被害を防ぐという実用的な役割を期待されていた。また養蚕において蚕をネズミから守るためにも重宝された。養蚕技術をまとめた日本最古の養蚕書「蚕飼養法記」（こがいようほうき 江戸期刊行）には、養蚕家は「家々にかならず能（よき）猫を飼置くべし」とある（展示資料は後世の複製版）。日本の養蚕業は、中国産の生糸の輸入が制限された17世紀末を契機に特に東山道諸国において盛んになり、19世紀後半の開港で急激に発展した。「能猫」とは、ネズミをよせつけないネコ、ということになるのだろう。展示資料24『猫の民俗学』では、養蚕地帯を中心とする農山村で鼠除けとしてネコが重宝がられていたことが詳しく記されている。

23. 猫の歴史と奇話 / 平岩米吉 著. 築地書館, 1992.10【RB651-E289】

第1章で紹介した展示資料2『和漢三才図絵』には、「およそ十有余年の老牡猫の中には妖けて災いをなすものがある。伝えによれば、純黄赤毛のものが多くは妖をなす」との記述がある。この妖をなすネコというのは猫股のことで、古くは鎌倉時代に藤原定家（ふじわら ていか）によって書かれた日記『明月記』にも登場する。江戸時代には様々な文献に記され、展示資料では猫股の描かれ方の変遷をみることができる。このほか、36歳まで生きた「よも子」や、100 km以上離れた場所から家に帰ってきた各地のネコ、ネズミやイヌを育てたネコなど、国外の事例も紹介している。著者の平岩米吉（1898-1986）は、シートンを日本に初めて紹介した動物学者で、平岩犬科生態研究所を設立するなど、イヌやニホンオオカミの研究者として知られている。

24. 猫の民俗学 増補 / 大木卓 著. 田畑書店, 1979.9 【GD1-164】

日本各地や国外のネコにまつわる言い伝えや俗信、文化について民俗学的な視点でまとめている。「猫の年中行事」「猫の葬式」「猫の嫁入り」など、テーマはいずれも興味深い。ネコが度々家出する飼い主にとって、「失せ猫が戻る呪」は気になる情報ではないだろうか。

★25. 「猫のさうし」(掲載資料 日本古典文学大系. 第 38 / 岩波書店, 1958 【918-N6852】)

館内限定公開

江戸時代前期に出版された御伽草紙（おとぎぞうし 展示資料は復刻版）。慶長 7（1602）年 8 月中旬に京都の洛中に猫の綱を解き放つこと、売買を禁止することを命じた高札が立てられた。ネズミは身の危険を高僧の夢枕に立って訴え、それに対してネコが反論し、最後はネズミが京を去るという物語になっている。挿絵のネコは威風堂々とした様子でまるで虎のようだ。高札の内容はフィクションではなく、京都の貴族・西洞院時慶（にし のとういん ときよし）の日記『時慶記』には、慶長 7 年に同様の命令が出ていたこと、それにより迷子になったリヌに噛み殺されるネコが多かったことが記されている。背景としては、都市におけるネズミ害の問題があったようだ。三雲家文書によれば、天正 19（1591）年にも類似の禁制（ネコを盗み取ること及び他所から離れてきたネコの捕獲の禁止、ネコの売り買いをした者は処罰）が京都で出されていた。なお原本の「ねこのさうし」は国立国会図書館デジタルコレクションで画像をインターネット公開している（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2537584>）。

参考文献：藤原重雄『史料としての猫絵（日本史リブレット；79）』2014 【KC172-L30】

★26. 「猫狗説」(掲載資料 古今文章評解 2 / 村山自彊 著. 奎文堂, 明 17.1, 【特 34-177】)

館内／図書館送信

イヌが人に疎まれる一方でネコが愛される理由として、見かけや声音、性格を挙げ、ネコが得をしイヌが不当に扱われていると憂えている。この「猫

狗説」は、明治前期の教科書、名家文集などの出版物に多数掲載されたことから、青少年を中心とした読者へ影響を及ぼしたことが考えられる（明治期は一般的にネコは人気がなくイヌが好まれていたことを展示資料 34 『猫が歩いた近現代』が当時の文献資料から考察している）。著者の頼山陽（らい さんよう 1780-1832）は江戸後期の歴史家・漢詩人。京都で私塾を開いて梁川星巖（やながわ せいがん）、大塩平八郎らと交わり、日本の武家の歴史を記した『日本外史』は幕末の志士に読まれ、幕末・維新期の思想界にも影響を与えた。

★27. 「猫説」（海紅園小稿 / 野田笛浦（逸）著. 野田鷹雄, 明 14.7 【144-192】

インターネット公開

頼山陽と同時代の儒学者・野田笛浦（のだ てきほ 1799-1859）による「猫説」では、一風変わった観点からネコを評価している。ネコが優れているのはネズミを捕える点ではなく、ネズミがネコを恐れて出てこなくなることで抗争せずにネズミを治めるところだという。当時の県令や官庁の治世を批判した上で、ネコの心を持ち威力によって統治する者こそ県令長官に相応しい旨を説いている（最後の「必ずや能く猫の心を以て心と為す者あらば、以て令たり長たる可し」）。

参考文献：方 亮「幕末経世思想に関する一考察：漢学者野田笛浦を中心として」『千葉大学人文公共学研究論集』（42）, 2021.3 p.1-18 【Z22-B269】

★28. 京都民俗志 / 井上頼寿 著. 岡書院, 昭和 8 【640-105】

インターネット公開

京都市を中心に洛中洛外の土俗に関する情報をまとめたもの。著者が現地足を運び聞き取りも行いながら集めたという対象は、鳥居や井戸、石のほか植物や動物など多岐にわたり、来歴や伝説などが書かれている。ネコについては、光清寺にある絵馬の猫が夜に鳴き水を飲みに出てくるという出水の七不思議などの伝説が紹介されている。

★29. 「白駒氏飼猫奨励法」(掲載誌 東京パック / 東京パック社, 5(4)
1909-02 p.7<雑 13-3>)

館内/図書館送信

明治後期に日本ではペストが大流行し、1909(明治42)年に内務省から各府県に対してネコを飼育を奨励するよう命じた。これは、1908年に来日したドイツの細菌学者ロベルト・コッホが、ペスト予防にはネコでネズミを駆除することが効果的と主張したことが影響している。展示資料は、当時の様子を示した風刺画。内容はあくまで事実とは異なるが、上からネコ飼いを奨励する異様な状況を表している。この影響でネコの価格が急騰し輸入も行われたが、あくまで一時的なものでネズミ退治用の殺鼠剤の登場により終焉することになった。

30. 淡青：東京大学広報誌 / 東京大学広報室 編. 東京大学広報室, (37)
2018.9 【Z71-J300】

「淡青」(たんせい)は東京大学広報室が年に2回発行している広報誌。「猫と東大。」をテーマにしたこの号では、「猫と日本文学」や「猫と医科学」、「猫と経済史学」といった多彩な切り口もさることながら、教員陣が執筆した記事の奥深さには目を見張る。発行後は大きな反響を呼んだようで、加筆した上で単行本も刊行されている(東京大学広報室 編『猫と東大。 : 猫を愛し、猫に学ぶ』2020 【RB651-M118】)。

31. 大佛次郎と猫：500匹と暮らした文豪 / 大佛次郎記念館 監修. 小学館, 2017.2 【KG669-L80】

ネコ好きの作家といえばこの人、大佛次郎(おさらぎ じろう 1897-1973)。展示資料は大佛のエッセイや写真、蒐集した猫の人形や絵をまとめたもの。大佛は「鞍馬天狗」や「赤穂浪士」といった作品で幅広い層から支持を得た。ネコ愛好家としても知られ、大佛家に住んだネコは500匹を超えるといわれる。ネコを見ていて生まれたという童話作品『スイッチョねこ』(※)のエピソードや挿画は見ていて楽しくなる。また p.36 の部屋中にネコがたむろする様子や、p.49 の無残な障子と大佛次郎の写真にも注

目。

※『スイッチョねこ』は、『こども朝日』朝日新聞社, 1946年10月1日号 p.12-14 に掲載され、その後複数の出版社から刊行されている。

★32. 水俣病：写真集 / 桑原史成 著. 三一書房, 1965 【748-Ku961m】

館内限定公開

水俣病を記録した先駆的な写真集。水俣病が漁民に発症し始める 1950 年代初期に、漁村のネコたちが奇声と奇怪な動きで次々と死ぬ現象が起きた。ここに写っているのは、熊本大学医学部の研究室で実験的に水俣病を発病させたネコ(※)である。著者である写真家の桑原史成(くわばら しせい 1936-)は、水俣病患者や仕事を奪われた漁民の生活取材し、1962年の企画「水俣病」では大きな反響を得た。1950年代に水俣市で発生した水俣病は、新日本窒素肥料株式会社(現チッソ株式会)の工場排水中に含まれる有機水銀が原因。現在も症状や補償を含む様々な問題は続いている。※展示資料 33 の著者伊藤蓮雄が実験したネコかどうかは不明。

33. 水俣病の病理学的研究 / 伊藤蓮雄 【UT51-41-E7208】

著者の伊藤蓮雄(いとう はすお ?-1991)は執筆当時熊本県水俣保健所長で、水俣病が水俣湾内の魚介類に起因することをネコによる二つの論文で示した。一つ目の論文では、水俣湾内で獲った魚介類を7匹のネコ(子ネコ含む)に与える実験で、うち5匹が論文執筆時点(※)で発症し、発症までの期間は早くて7日、最長で48日としている。

※実験は昭和32年3月以降に開始、論文の雑誌刊行は同年6月。一つ目の論文は『熊本医学会雑誌』(熊本医学会, 31巻(補冊第2) 1957-06 p.282-289 【Z19-155】)にも掲載されている。

34. 猫が歩いた近現代：化け猫が家族になるまで / 真辺将之 著. 吉川弘文館, 2021.6 【RB651-M146】

新聞雑誌記事を含む膨大な文献を手掛かりに、日本の近代から現代にかけ

ての人間社会でのネコの歴史を描いており、客観的かつ俯瞰的な歴史書として類を見ない。ネコを家族のように愛することが一般的になったのは現代になってからであること、イヌに比べるとネコは一般的に人気がなかったことなどが分かる。ペスト流行時に飼猫が奨励されたり、戦中はネコやイヌの飼育に批判が高まり一部に税金が課され、毛皮を目的とした献納・供出が求められるなど、ネコが人の都合に翻弄されてきた様子を知ることができる。都市化に伴う捨て猫や野良猫、殺処分の問題なども取り上げている。

35. ペット六法 法令篇 第 2 版 / ペット六法編集委員会 編. 誠文堂新光社, 2006.2 【A561-H56】

36. ペット六法 用語解説・資料篇 第 2 版 / ペット六法編集委員会 編. 誠文堂新光社, 2006.2 【A561-H57】

はしがきには「世界初のペット六法として社会的に大きな注目を集め（中略）第 2 版で内容を大幅に刷新して再度世に問うことにした」とある。法令篇と用語解説・資料篇の 2 冊で構成され、条例や国内法令だけでなく、主要国の法令、用語や法令の解説、主要判例などを収録し、法律を中心としたペットの総合解説書になっている。ペットと人がどのように共生するか考える上で、現在の法整備を知る視点は大切だろう。ただし刊行から 15 年以上経過しているため、掲載情報には注意が必要（例として「動物の愛護及び管理に関する法律」は、展示資料刊行後の令和元年 6 月に大きく改正された）。

37. ペット産業 CSR 白書：生体販売の社会的責任 / 奥田順之 著. 人と動物の共生センター, 2018.3 【DH475-M143】

ペット産業の課題を整理し、CSR（企業の社会的責任）の先行事例や全体像を提示することで、CSR の考え方が普及し、企業の自序作用を促進することを目的として書かれた。「発行を皮切りに、まずは、ペット産業を取り巻くステークホルダーによる対話の場づくりを行っていききたい」という著

者は、獣医師でもある。



ネコを描く～表現されたネコ～

ネコは人間の表現活動においても、古今東西で創作の対象となり、親しまれてきました。このトピックでは、古典や絵画など創作物に表現されたネコについて、和歌に詠まれたネコから、人化した化けネコ、おもちゃのネコ、ネコ型ロボットに至るまで、様々なネコをご紹介します。

★38. 古今和歌六帖 上巻 (本文篇)(図書寮叢刊) / 宮内庁書陵部 編, 養徳社, 1967 【911.137-Ko544-K】

館内／図書館送信

『古今和歌六帖』は、編者・成立年代未詳であるが、貞元（じょうげん）・天元（てんげん）年間（976～983）の成立といわれ『万葉集』から『古今集』『後撰集（ごせんしゅう）』のころまでの歌約4500首を収める。展示箇所124首目の和歌に「てかひのとら（手飼いの虎）」という言葉が登場する。手飼いの虎とは飼い猫のことを指すものであり、日本でも古くから猫が飼われていたことが伺い知れる。

★39. 定本源氏物語新解 中 / 紫式部著, 金子元臣 解. 明治書院, 1928 【913.36-Ka53 イウ】

インターネット公開

日本最古の長編小説である『源氏物語』にもネコは登場している。若菜上・下において、光源氏の正妻となった女三宮（おんなさんのみや）がネコを飼っており、そのネコが女三宮と柏木との許されぬ恋路を導くのである。この物語においてネコの鳴き声が「ねうねう」と表現されるが、「寝よう寝よう」と柏木には聞こえている。

★40. 吾輩ハ猫デアル / 夏目漱石 著. 大倉書店, 明 38-40 【26-344】

インターネット公開

言わずと知れた夏目漱石の処女小説。単行本には3人の絵師（浅井忠（あさい ちゅう）、橋口五葉（はしぐち ごよう）、中村不折（なかむら ぶ

せつ))による挿絵が描かれている。動物のネコを主役として人気となった小説で、三者三様のネコの絵も楽しむことができる。

★41. 百猫画譜 / 仮名垣魯文 編, 立斎広重 画. 和同開珍社, 明 11.3
【209-312】

インターネット公開

仮名垣魯文(かながき ろぶん)の発刊した雑誌『魯文珍報』(ろぶんちんぼう)からネコの特集号を単行本としたもの。挿絵のネコは三代歌川広重によって描かれたもので多様な動きのあるネコを見ることができる。

★42. 暁斎画談 外篇 卷之上 / 河鍋暁斎 画, 瓜生政和 編. 植竹新[ほか], 明 20 【11-111】

インターネット公開

河鍋暁斎(かわなべ きょうさい)の生い立ちを、戯作者梅亭金鷲(ばいてい きんが)として知られる瓜生政和(うりゅう まさやす)の文と暁斎の絵で綴ったもの。暁斎(幼名周三郎)は、数え七歳の時に浮世絵師である一勇斎國芳(いちゆうさい くによし 歌川国芳)に入門した。ネコ好きとして知られる國芳は、当時の様子を描く暁斎の絵においてもネコに纏わりつかれている。その横で絵を教わっている子どもが暁斎である。

★43. 芳藤手遊絵尽 / 芳藤 画. 温故木版印刷会, [大正 8] 【186-246】

館内/図書館送信

歌川芳藤(うたがわ よしふじ)による手遊び絵の画集、展示箇所では、擬人化されたネコがうなぎ屋で楽しんでいる様子がうかがえる。歌川芳藤は幕末から明治時代にかけての浮世絵師で、歌川国芳の門弟である。手遊び人形の衣装といった緻密な模様を描くのを得意とし、手遊芳藤という渾名で呼ばれていた。手遊び絵とは、玩具絵(おもちゃえ)とも呼ばれ、江戸時代から明治時代に描かれた浮世絵様式のひとつで、子どもが玩具として遊んだり絵本として楽しむために描かれていた。

★44. 巨泉おもちゃ絵集 / 川崎巨泉 著. おもちゃ絵版画会, 大正 7-8
【422-29】

インターネット公開

川崎巨泉（かわさき きょせん）は、大阪で活躍した明治時代の浮世絵師で歌川芳瀧（うたがわ よしたき）の門弟である。芳瀧の婿養子となっ
てからは、師の後を継ぎ、新聞・雑誌の挿絵等を描いていたが、明治 36～37
（1903～1904）年頃から郷土玩具を収集しその絵を描くようになった。
令和 4 年用の日本郵便の年賀切手（干支の寅）の絵には、巨泉の絵が使用
されている。

★45. [お伽噺] 猫のしばい / 小森宗次郎, 明 21.7 【特 59-997】

インターネット公開

子ども向け絵本。ネコを擬人化し芝居を演じさせている。展示箇所は、勸
進帳的一幕を『かんじん帳⇒にゃんじん帳』等とネコっぽくアレンジして
繰り広げている。

★46. [絵本] [1 1] 佐賀怪猫伝 / 牧金之助 編, 梅堂国政 画. 金寿堂,
明 20-21 【特 59-941】

インターネット公開

佐賀の化け猫は、江戸時代初期に佐賀藩鍋島家に実際に起こったお家騒動
を基にして創作された物語である。嘉永 6（1853）年に「花野嵯峨猫魔稿
（はなのさがねこまたぞうし）」として中村座が舞台化しようとするが、佐
賀藩鍋島家から苦情が入り上演中止となったことでかえって有名となり、
明治 13（1880）年には「嵯峨奥妖猫奇談（さがおくようみょうきだん）」
が上演されている。

★47. 無門関解釈 / 紀平正美 著. 岩波書店, 1936 11 刷【188.84-E392Km】

インターネット公開

禅の公案として「南泉斬猫（なんせんざんみょう）」にネコは登場する。こ
の公案は三島由紀夫の「金閣寺」にも引用されている。公案内でネコは斬

られてしまうが、中国から金沢文庫に書物を多く運んだ際に書物とともに船に載せられ上陸した猫を金沢猫と呼んで親しんでいたように、古くから書物をネズミから守る存在としてネコは重宝されていた。

★48. 蘆雪名画選 / 長沢蘆雪 [画], 恩賜京都博物館 編. 芸艸堂, 昭 12
【427-55】

インターネット公開

展示箇所に「南泉斬猫」の一幕が描かれている。長沢蘆雪（ながさわ ろせつ）は江戸中期に京都画壇で活躍した絵師で円山応挙（まるやま おうきょ）の弟子である。写生を取り入れた写実的な作風とは対照的に、蘆雪の絵は奇抜で奔放な画風である。

★49. 画図百鬼夜行 / 鳥山石燕 著, 田中初夫 編. 渡辺書店, 1967【721.8-To564g】

館内限定公開

猫又という妖怪は、鎌倉時代初期に書かれた藤原定家（ふじわら ていか）による「明月記」に、今の奈良県で多数の死者を出したと記事に残されているのが初出とされている。

鳥山石燕（とりやま せきえん）は江戸時代中期の町狩野の絵師で、多数の妖怪画を残したことで知られる。猫又を二股の尾を持つネコとして描いている。

50. โดราเอมอน : แมวจอมยุ่ง / มิตรไมตรี, [n. d.] 【Y745-H13】

タイ語の『ドラえもん』。藤子・F・不二雄によるネコ型ロボット創作の舞台裏が「ドラえもん誕生」という話で語られている（展示資料に掲載）。ネコと子ども向け玩具を結び付けることで、今なお人気のキャラクターを生み出した。

タイ語版は右開きのため、絵柄が左右反転している。「โดราเอมอน」はタイ語の発音で「ドラえもん」。タイ語で「ネコ」は「แมว (メーオ)」と言う。

51. コミックデ・ジ・キャラット v.1 / ブロッコリー, 2004.10 【Y84-

H14777】

日本のおたく文化の萌え要素の一つとして猫耳が挙げられる。猫耳にも分類があり、江戸時代の浮世絵等に見られるネコが人化または人がネコ化した際のネコのモチーフとして残された猫耳と、デ・ジ・キャラットののようなアクセサリーとしての猫耳である。

52. 世界の猫の民話 / 日本民話の会, 外国民話研究会 編訳. 三弥井書店, 2010.2 【KE222-J3】

日本以外の世界のネコ（ライオン、虎、ピューマを含む）の民話が全七章に分けてまとめられている。ネコの由来にまつわる話（第一章）、人を助けるネコの話（第四章）や悪魔的なネコの話（第五章）等が収録されており、ネコと人との関係性を物語として伺い知ることができる。

53. いつだって猫展 / 名古屋市博物館 編. 「いつだって猫展」実行委員会, 2015.4 【KC16-L1689】

平成 27（2015）年に名古屋市博物館で開催された展示の図録。浮世絵を中心として江戸時代から明治時代にかけてのネコブームに迫る展覧会であった。装丁もブリティッシュ・ショートヘアを思わせるふわふわな肌触り。

54. 日本流行歌史 上 新版 / 古茂田信男 [ほか]編. 社会思想社, 1994.9 【KD841-E1204】

55. 昔話・伝説の伝承過程における人々の選択：踊り歌う猫の話をも事例に / 小林光一郎 [著]. [2010] 【UT51-2011-L809】

江戸時代後期から明治時代にかけて流行歌として「猫じゃ猫じゃ」という曲がある。本歌は「蝶々蜻蛉（ちょうちょうとんぼ）」であり、歌詞の対象が虫からネコへと変化していった。ネコへと変化した背景として、芸者をネコと呼んでいたことや、展示資料 46 に見られるように江戸時代後期にネコ騒動物が流行ったことから「猫じゃ猫じゃ」も流行したという説がある。また明治時代には新政府の官員が髭を生やし偉そうにしていたことで、

民衆の鬱憤は「猫じゃ猫じゃ」と髭を生やした官員を揶揄する歌となったとも言われている。

56. 現代思想：総特集 猫！ 44(4)(臨増)/青土社, 2016.3【Z9-368】

特集として著名人によるネコについてのエッセイが寄稿されている。「猫の人化／人の猫化 猫の擬人化の現代性」では、鳥獣戯画等に見られる日本の<見立て>の文化から、化け猫、ゆるキャラのような人化する猫、一方で、現代のおたく文化における萌え要素としての猫耳を生やした人型のキャラクターが定番化していくが、いずれも猫は<カワイイ>という概念を象徴するものとして位置づけられている、と著者は言う。

57. 招き猫百科 = The graphics of Manekineko / 荒川千尋 文, 日本招き猫倶楽部 編, 板東寛司 写真. インプレス, 2015.9【GD33-L226】

招き猫の誕生伝説の紹介から、全国の郷土玩具としての招き猫、はたまた招き猫ギターまで、さまざまな招き猫が一堂に会す一冊となっている。

58. 浮世絵芸術 = Ukiyo-e art : 国際浮世絵学会会誌：特集 犬と猫と (152) / 国際浮世絵学会, 2006【Z11-304】

「犬と猫と」という特集が組まれている。論文「歌川国芳画『朧月猫草紙』と猫図」では、全7編からなる草双紙『朧月猫草紙』各篇における国芳の筆の変化について考察されている。天保の改革による影響や他の草双紙における国芳の猫図との比較等がなされている。

コラム

- ・ 図書館ねこデューイ：町を幸せにしたトラねこの物語 / ヴィッキー・マイロン 著, 羽田詩津子 訳. 早川書房 2008.10 【RB651-J92】
- ・ 小さな図書館の挑戦 - 「猫ノ図書館」開設とねこ館長 - / 渡辺貴子 (掲載誌 カレントアウェアネス / 国立国会図書館図書館協力課 2017.9 【Z71-K788】)

図書館でのネコ展示ということで、やはり気になるのは図書館とネコの関係。図書館とネコの関係は古く、書籍をかじるネズミへの対策として、ネコが図書館等で重宝された事例がある。日本では、金沢称名寺に文庫があり、中国から書物を多く運んだ際にネズミ防止のためネコを船に乗せていた、という記述が、貝原篤信（益軒）の『日本釈名』（1700年刊）により確認できる（※）。

ここ40年ほどは、図書館のマスコットとして活躍するネコ「図書館ネコ」が多くみられる。海外の事例では、1988年から2006年まで、アメリカのアイオワ州スペンサー公共図書館で働いていた「デューイ・リードモア・ブックス（Dewey Readmore Books）」が有名である。日本でも、例えば、奥州市立胆沢図書館の「猫ノ図書館」のネコ館長「むぎ」、棕鳩十記念館・記念図書館のネコ館長「ムクニャン」が現在活動中である。彼らをはじめとした「図書館ネコ」の主な業務は、広報、来館者との交流である。

ちなみに、関西館が運営を担当している、図書館界・図書館情報学に関する最新の情報をお知らせするサイト「カレントアウェアネス・ポータル」（<https://current.ndl.go.jp/>）のマスコットキャラクターもネコである。先述のデューイ、むぎ、ムクニャンについてもいくつか記事が掲載されている。興味をお持ちの方は、これを機に、是非「カレントアウェアネス・ポータル」にアクセスいただければ幸いである。

※参考文献

日本釈名 3 卷 [1] / 貝原篤信 編. 長尾平兵衛[ほか 1 名], 元禄 13 [1700]

【特 1-1625】: 東京本館所蔵 インターネット公開

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2556897>



画像は『百猫画譜』より

**国立国会図書館関西館 第29回資料展示
結構毛だらけネコ本だらけ 展示資料解説**

会期：2022年2月17日（木）～3月15日（火）

会場：国立国会図書館関西館閲覧室

発行：国立国会図書館

編集：国立国会図書館関西館資料展示班